

ロイズ銀行初期金融 ——「インサイダー・レンディング」を超えて——

立教大学大学院研究生 陶山 悠紀美

「インサイダー・レンディング」とは、ラムルー(Lamoreaux,N.)によると銀行がその資金を自身の取締役かその家族又は取締役と個人的に親密なものに貸したことである。

従来の研究では初期イギリス銀行業は親戚関係や宗派を同じくするなどして個人的関係にある者には融資を手厚くするなどして比較的自由に長期資金を与えていたという。18世紀の製造企業は自己の事業への資金調達のために銀行をつくることも多かった。その流れが変わるのは19世紀の半ばを過ぎてのことである。すなわち、19世紀中葉以後の恐慌などを経験することにより、銀行は従来の貸付姿勢を改め、融資先を多様化し短期金融に特化していった(なかには長期金融をしていた事例もある)。

この従来の研究に対して本報告でとりあげるテイラーズ・アンド・ロイズ銀行ではかなり異なる対応をとったことが史料から明らかになった。初期ロイズ銀行であるテイラーズ・アンド・ロイズ銀行は創業(1765年)間もないころから宗教的個人的関係ある者に限定せずに融資先を多様化し、「インサイダー・レンディング」からも早期に離脱した。このことにより、広範な対象に短期金融をしていたというイギリス型金融は必ずしも恐慌などを経てから形成されたといわけではないといえる。

テイラーズ・アンド・ロイズ銀行は18世紀後半にウェスト・ミッドランド地方のバーミンガムに Sampson・ロイド(クエーカー)らのパートナーシップによって創業された銀行である。Sampson・ロイド1世はバーミンガムに移住して鉄卸業を開始し成功を収めた。2世は父がつくった製造業への足場を固めた。しかし、7年戦争後の不況にあえいでいた鉄業界への不安から危険分散のために銀行業へ参入していくことを決断した。テイラーズ・アンド・ロイズ銀行は当時の銀行としては後発で相対的に小規模であったため、当初から顧客をクエーカーに限定せず他の宗派の人たちとの提携の必要性を認識していた。このことは17世紀末に創業されたバークレイズ銀行とは対照的である。バークレイズ銀行は金匠銀行でクエーカーにより特化したロンドン個人銀行であった。18世紀には情報伝達の手段も限られているため「インサイダー・レンディング」は機能したが、銀行間競争の激しくなる時代を迎えて衰退していく。初期ロイズ銀行も「インサイダー・レンディング」のころ繁栄したが、冒険的金融とは一定の距離をとっていたがために成功を継続させていった。地方銀行は実業家の事業の単なる金融付属物から地域の貯蓄を集め短期商業貸付の形で信用に値する借り手へ貸し付けることにより利益をえるようになる。

本報告によって、「インサイダー・レンディング」のころにテイラーズ・アンド・ロイズ銀行が繁栄していったことを確認するとともに、それとの距離のとり方を他行との比較および時の推移の中で検討したい。それによって、いわば地方銀行の自立の過程への理解が少しでも深められればと思う。